

桁倉沼

**桁倉沼の主**　桁倉沼には、鮒・小えび・ごりがいて昔から小安村の人たちは、そこで漁をして生活の糧にしていただど。沼に弁天島という島があって、その裏側は三丈七尺（約二一・一メートル）もの沼一番の深さで魔物の住み処であることから人が行き来してはいけない所だとされていて、沼で漁をする人もいくら多くの魚がいても、そこだけには近寄ることがなかったど。

ところが村の長八というおじいさんが、いつものように漁にいった時、ふだんであれば思うように魚がかかっていたが、その日はさっぱりであったけど。それで沼の中ほどに行ったら取れると思って、筏を組んで、これに乗ってこいで行ったけど。魚が取れねで、あせっていたことだったべな。ふだんであれば近寄らない弁天島の裏側さ差しかかったんだど。そうしたら不思議なことに、いくらこいでも筏は進まなくなって、見るうちに筏のまわりに真白いものが隙間なくひっかがって筏が沈みかけたんだけど。おじいさんは、びっくりして腰にさしていた山刀を抜いて、無我夢中でこの白いものを筏から切りはなして、ようやく助かったけど。

あとになってから、わかったことだけれども、その時の白いものは、けたくら沼の主の「くも」が張った糸であったけど。

それからは、小安の人たちは、どこさ行く時も腰から山刀をはなさなくなったし、弁天島の裏がわには近寄らなくしているど。

（古老の話）

桁倉沼には大昔から沼の主がおり、沼に金気（金属）を入れて沼の深さを測ってはいけないという不文律があった。ある時、村の若衆二人が沼辺に馬の草刈りに出かけた。二人は一服しながら世間話をした末、一人がなにを思い出したか、この沼の深さをはかってみようと言い出した。一人は主のたたりが恐いからと何度も止めたが、まるで悪魔にでもつかれたように聞き入れず、沼辺に生えている葛のつるを長く結び沼の中に泳ぎ入り、葛のはしに石のおもりを付けはかり出した。葛のつるはづるづると沼に入り、いくらのばしてもいくら葛のつるをつぎたしても底には届かなかった。

そうしているうち、その若者も葛に足をからまれ、沼にしずんでいってしまった。その若者は、「お前が止めたとおりだった。おれが悪かなことは止めろよ」といって沼の底にあっけなく沈んでいってしまった。

その後、その沼辺には馬に喰わせる葛が生えなくなった（『小安峡温泉』）。